

裸の記憶

－雑誌 *Das Magazin* における東ドイツの性規範の再構築－

文化社会研究所

招聘研究員 嶋田由紀

要 旨

ベルリンの壁崩壊後、40年ぶりの再会を果たした東西ドイツ人は、お互いの文化が全く異なってしまったことに驚いた。本稿では、雑誌 *Das Magazin* を手掛かりに、この東西文化の遭遇から事後的に明らかにされる東ドイツの性規範とそれについての東ドイツ出身者の評価の変化を追う。東ドイツ出身者は、ポルノグラフィを禁止していた旧体制を性の抑圧として否定的に当初は捉えていたが、旧東ドイツ地区のFKKビーチにおけるヌーディストの氾濫と水着着用者の混在が西ドイツ出身者によって不道德だと非難されると、ポルノグラフィの不在こそが裸体を卑猥な視線で捉えない文化を可能にしたのだ、と評価を逆転させる。ここには、性の商品化の禁止が実現せしめた東ドイツにおける開放的な裸体文化に対する再評価と、「剥き出し」の裸体を回避しようとする西ドイツの性規範への批判が観察できる。「オスタルギー」という語で総括されるこのような東ドイツ出身者の言動は、自らの性規範を肯定的に再構成することで、統一後のドイツ社会を生き延びようとする戦略だと理解できる。

キーワード

性規範、裸体主義運動、ポルノグラフィ、裸、東ドイツ、西ドイツ、オスタルギー

英文要旨

Following the fall of the Berlin Wall, East and West Germans reunited after forty years were surprised by the fact that their respective cultures had been completely different. Using *Das Magazin* as a guide, this article tracks changes in sexual norms in the former East Germany that have become apparent gradually after the encounter between East and West, and in their evaluation by the East Germans themselves. People from DDR (Deutsche Demokratische Republik: German Democratic Republic) initially took a negative view of the proscription of pornography under the DDR system as a suppression of sexuality. However, when the admixture of nudists and persons in swimsuits on FKK (Freikörperkultur: nudism) beaches in the regions of the former DDR was criticized as immoral by West Germans, former East Germans reversed their view, holding that the very absence of pornography itself had enabled a culture that did not see nudity as obscene. In this re-evaluation of the open culture of nudism realized under the former DDR's ban on the commodification of sex, we can observe the criticism of West German sexual norms based on Christian notions of the "naked" body as taboo. This positive reconfiguration of their own sexual norms, like other former East German discourses summed up in the term "Ostalgic", can be understood as a survival strategy in the post-unification German society dominated by West German values.

1. はじめに

ベルリンの壁崩壊（1989年11月）後、ほぼ40年ぶりに再会した東西ドイツ¹人は、この分断期間に醸成されたお互いの文化が理解不能なほど違ってしまったことに戸惑いを隠せなかった。この東西文化間の衝突は、西側の経済的・政治的優位から、東ドイツ文化の否定という形になって表れた。ドイツ統一（1990年10月3日）後数年のうち、旧東ドイツ地区からは旧体制やイデオロギーを偲ばせるものが撤去され、西側色に塗り替えられた。東ドイツ出身者は、当初はこの「西ドイツ化」を率先して行っていたものの、通貨統合による旧東ドイツ地区の経済崩壊、失業問題、西ドイツ出身者による東ドイツ出身者蔑視²に加え、東ドイツの風景を失い亡国の民となった現実を前に、「東ドイツ時代にもどりたいわけではない」、しかし、東ドイツの「すべてが悪かったわけではない」という感情を強くする（Ahbe 2005: 14-39）。いわゆる「オスタルギー（Ostalgie）」である。「オスタルギー」とは、東ドイツを指すドイツ語の“Ost”とノスタルジー“Nostalgie”を結合させた造語で、「今は亡き」東ドイツを懐かしむ現象一般を指す。こういった東ドイツ文化の再評価は、東ドイツ出身の若者の間で始まり、その粘り強い活動が功を奏して、現在では東ドイツを体験したことのない西ドイツ出身者や東西ドイツ時代を知らない若い世代にまで広がっている³（Ahbe 2005: 42-66）。しかし、このようなオスタルギーの一般化は、商品化可能な品物⁴に限定されており、無形物である規範や行動様式に対する再評価は東ドイツ出身者内に留まり、一般的な承認にまでは至っていない。そこで、本稿では、無形文化に対する東ドイツ出身者によるオスタルギーの一例として、裸体をめぐる文化を取り上げ、統一後の東西文化の衝突から事後的に明らかにされる性規範と、それに対する東ドイツ出身者による評価の変遷を追っていくこととする。その際、裸体観を読み解くメディアとして、本稿では東ドイツ時

代から現在まで継続して発行されている雑誌*Das Magazin*（以下、DMと略称）を扱う。この雑誌は、主に成人男性・女性を対象としたエロスと愛を扱う東ドイツにおける唯一の月刊娯楽雑誌として1954年に創刊された。創刊時から壁崩壊まで価格が1東ドイツマルクのまま変わらなかったこと、ヌード写真やエロス文学の掲載と並んで比較的教養度の高い内容であったことから人気を博し、壁崩壊直前は発行部数56万部を誇っていた。東ドイツ時代の編集長はマンフレート・ゲプハルトが10年以上（1979-1991/5）務め、統一直後は、ヴォルフ・ティーム（1991/6-1992/6）、ハルトムート・ベルリン（1992/7-1994/9）、マルティーナ・レリン（1994/10-2001/2）と目まぐるしく変わったが、編集部は東ドイツ出身者が大部分を占めている。壁崩壊後、3マルクに値上げされたが、購買数は維持している。その後、DMは購買数6万部に落ちたものの、マニエラ・ティーム（2001/3-）編集長のもと現在でも発刊され続けている。統一後、東ドイツの雑誌が次々と廃刊されるなかDMが生き残ることができたのは、資本主義体制へ順応すべく生活様式から行動様式まで180度変化させざるをえなかった東ドイツ出身者の立場に寄り添い、東ドイツ時代の価値観を尊重しつつも新しい統一ドイツのセクシュアリティを紹介していたからである。このような転換期におけるDMの特徴として、読者投稿が目まぐるしく変化する東ドイツ出身者の価値観を知る指標となっており、そのため、時には編集方針を左右するほどの力を持っていたことが挙げられる。よって、以下の分析は主に壁崩壊後からオスタルギーが社会現象となるまでの5年間（1990-1995）に発行されたDMに的を絞り、読者投稿欄に現れるディスクールを分析対象とする。

2. 1989年壁崩壊直後: エロスへの情熱

このような雑誌の性格上、壁崩壊後に刷新されたDMは、セクシュアリティを扱う真面目な

雑誌から「プレイボーイ誌の代用」(*Die Woche* 1994/9/1: Triumph der Provinz) に転落したと揶揄されても仕方のない体裁になっている。雑誌の刷新を前にDM編集部は、値上げの是非を問うとともに新しいDMはどうあるべきか読者から意見を募った(DM 1990/1: 3) ところ、値上げに同意する条件として、よりエロティックな内容、より過激なヌード写真を多数の読者が希望したからだ⁵。この理由として、ある読者は「西側のセックス・ショップの前にできた東ドイツ人の行列は、埋め合わせの要求(Nachholbedarf) がとつもなく高いことを証明している」(DM 1990/5: 25) と述べている。この意見は、東ドイツ体制と壁崩壊後の社会現象を端的に示している。性の商品化、つまり売春およびポルノグラフィーの流通を一切禁じていた東ドイツにおいては、一般の人々がポルノグラフィーを入手することは困難であり、そのガス抜きとして、DMをはじめとする数誌にのみ、国家お墨付きの「上品な」ヌード写真の掲載が許されていただけだった。それ故、壁崩壊後西側への通行が自由になると、商品化された性とはどんなものか一目見ようと東ドイツの人々がセックス・ショップに殺到したのである。したがって、DM編集部に寄せられた過激なヌード写真を熱望する声には、単に性的な欲望だけではなく、永きに亘るポルノグラフィーの欠乏状態の「埋め合わせ」への情熱も動機として含まれていたといえる。規制なしのヌードを手にするには、東ドイツ人にとって今や東ドイツ時代の性的抑圧からの解放の象徴となったのだ。よって、壁崩壊後から統一後の数年間のDMには、読者投稿欄にもDM雑誌記事にも「お堅い(prüde)」東ドイツに対し、「開放的な(freizügig)」西ドイツという比較表現が顕著に観察される。

3. 1990年夏、バルト海: 「パンツ戦争」

このような東ドイツ出身者の東西ドイツの性規範に対する評価に転機を与えたのは、ポルノグ

ラフィーではなく、FKKの習慣をめぐる衝突においてだった。FKK(Freikörperkulturの略称)とは、近代的都市生活から「真の生命力を回復する試み」すなわち「生活改良運動」として自然の中での裸体生活をモットーに19世紀末ドイツに勃興した裸体運動、いわゆるヌーディズムのことである(斎藤2011)。裸体主義は、20世紀初頭に本格的な活動をはじめ、戦後も東ドイツと西ドイツで独自の発展をみせた⁶。DMの編集者の一人であるウルリヒ・バックマンは、ドイツ統一を目前に控えた1990年の夏に東ドイツのバルト海ビーチで起こったFKKの習慣をめぐる衝突、いわゆる「パンツ戦争」について、このように報じている。

1990年、金払いの良い西からの休暇旅行者があらゆるところに散らばって、バルト海海岸の東ドイツ人に占拠されていない場所を陣取ったとき、多くの人は目を疑った。水着着用者と非着用者がごちゃ混ぜでビーチの砂の上をはしゃぎまわっていたのだから。市長や保養地責任者に苦情が殺到した。

DM (1995/7: 66)

「水着着用者と非着用者がごちゃ混ぜで」はしゃいでいたのは、東ドイツの休暇旅行者である。バックマンによれば、東ドイツでは1980年に75パーセント、1990年には78パーセントがFKK支持者だった(DM 1995/7: 68)。つまり、東ドイツの海水浴場では、水着着用の方がむしろ少数派であり、多くの遊泳客は裸で過ごすのが普通だったのだ。このようにFKKが大衆化していた東ドイツにおいては、指定された区域におさまりきれない水着非着用者たちが、水場のあるところなら「ほんの小さな池にいたるまで」(*Süddeutsche Zeitung* 1995/12/29: Wir sind so frei) 所狭しと氾濫していた。それ故、東ドイツの遊泳客は、FKKビーチの境界を示す標識の存在をあまり気にしなくなっていた。また、FKK指定区域には「自分とは違う考えを尊重する気風」があり、そこに水

着用者が紛れ込んでいたとしても、ヌーディストたちは脱ぐことを強要したりせず（リースナー 2012: 236-238）、着衣者と一緒に「はしゃぎまわ」れるほど寛容であった。したがって、その光景に「目を疑」い、苦情を申し立てたのは、西ドイツからの休暇旅行者である。その理由を、西側のメディアはこのように説明している。

西ドイツにも FKK は大きな運動としてあったが、しかし、裸の遊泳者ははっきりとそうと書かれた遊泳ビーチの範囲にとどまるか、公衆の興味本位の視線から遠ざけるための目隠しのある FKK 協会の敷地内で活動していた。[...] ビーチでの裸と水着着用者のごちゃまぜは、西ドイツ人にはなじみがない。

Norddeutsche Rundfunk (2011/8/8)⁷

西ドイツでは、裸体主義運動は戦後すぐに復活し、60年代後半には FKK 協会加盟者数が10万人を超すほど高まりを見せた。しかし、その後、裸体の提示が社会に対する若者の抵抗の証となるのと連動して、次第に裸になることが余暇活動の一つとなり始めたため、「生活改良」というモットーを掲げた組織的な FKK 活動が周辺化し (Bergmann 2000: 27-29)、FKK 協会加盟者数は減少していく⁸。つまり、統一前の西ドイツにおいて、裸体主義運動がかつての勢いを失っていたとしても、裸体になるという行為自体は社会的に容認されていたといえる。ただし、それはある条件のもとでの容認だったことを上の引用は明らかにしている。彼らの苦情は、裸体の指定区域外への氾濫と水着着用者の指定区域内への侵入に向けられている。これは、西ドイツ人にとって、裸の遊泳者が隔離されずに公衆の視線にさらされていることが問題だったことを示している。裸体を特定の区域に隔離し、公衆の視線から隠すことは、FKK 支持者・不支持者双方の利益にかなっていた。なぜなら、FKK 指定区域という名の裸体の隔離は、FKK 支持者にとっては外部からの「興

味本位の視線」から身を守り、その内部で思想を同じくする者と裸体へ特別な視線を共有するために便利であったし、FKK 不支持者にとっては裸体を見ずに済んだからだ。したがって、裸体は公衆から隠されるべきものであるという点で、西ドイツにおける FKK 支持者も不支持者も同じ性規範のパラダイムの上に立っていたのである。

このような裸体隠蔽のパラダイムの起源を「いにしへの神学」に置くジョルジュ・アガンベンは、その著書『裸性』のなかで、FKK を成立せしめた条件を指摘している。

二十世紀の初めに、人間の本性との対立が解消された新たな理想社会を体現するものとして、ヌーディズムを称揚する動きが、ドイツをはじめとしてヨーロッパ全土に広まった。このとき、ポルノグラフィや娼婦の猥褻な裸にたいして、「光の衣服 (Lichtkleid)」としての裸を対置することによってのみ、すなわち、恩寵の衣服としての無垢なる裸という、いにしへの神学的な概念を無意識的に呼び起こすことによってのみ、ヌーディズムの運動が可能になったということは、偶然ではない。裸体主義者たちが提示したものは裸ではなく衣服であり、本性ではなく恩寵だったのである。

アガンベン (2012: 110)

先に指摘したように、裸体主義運動は「生活改良運動」として起こったものであり、キリスト教的道徳観への反発から起こったものではない。しかし、裸体主義思想の内実とは別に、それを運動としてキリスト教的文化社会の中で成立ならしめるためには、裸体を卑猥だとみなす人々に対して、それが卑猥でないことを示す正当化のディスクールが必要だった。その際重要なのは、ポルノグラフィという語が娼婦 (pórnē) の記録 (-graphie) を意味していることからわかるように、裸体をどう捉え、どのような視線で見ると記

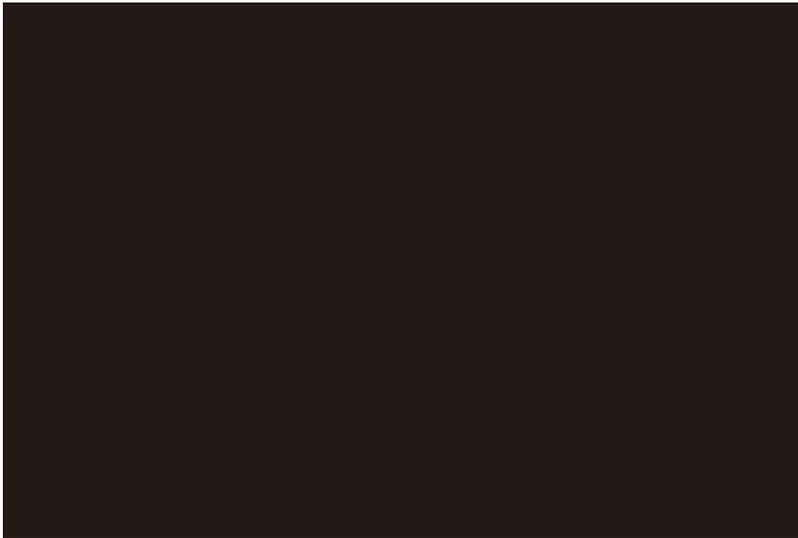


図1 G. Riebicke (Surén 1936: 147)

述するかである。「光の衣服」とは、ヴァイマルからナチス期にかけて活躍した裸体主義運動家、ハンス・ズーレンの言葉である (Surén 1924: 13) が、それが娼婦の裸体の記述とどう差異化されたかは、ズーレンの著作に掲載されたヌーディストの裸体写真 (図1) を見れば、すぐに了解できる。当時のアーリア主義の理想に倣ってギリシア彫刻のように鍛え上げられ、油を塗られた身体は、文字通り「光の衣服」を纏っている。ポルノグラフィとは異質なものとして大理石像のように「無性化された身体」(多木 1992: 140) は、一般の鑑賞に堪えられるように仕立て上げられている。このような「光の衣服」を纏わせることによる「剥き出し」の裸体の忌避には、旧約聖書の失樂園をめぐる神学的解釈の伝統が存在したとアガンベン指摘する。かの「いにしへの神学」では、人間の「本性」は裸だとされているが、とりわけ性器を露わにするという意味での裸は忌むべきものとされている。なぜなら、「罪の帰結を定義づける」「欲情 (libido)」すなわち「陰部 (obscenae) から発せられる制御不能の興奮」が「意に反して器官を動揺させる」からである。しかし、そのような事態は原罪以後の人間に起こり得るのであって、「器官の反乱」を知らなかった原罪前のアダムとイヴには有り得ない。よって、神の樂園におけるアダムとイヴは「剥き出し」の裸だった

のではなく、自らが裸であることを知らない「非着衣 (Unbekleidet)」の状態にあり、アダムとイヴは、「神の恩寵」を衣服のように纏っていたのだ (アガンベン 2012: 97-118)。このような背景から、裸体主義者たちは、FKKにおける裸体がセックスとは無関係であることを示すために、原罪前のアダムとイヴという「いにしへの」シェーマを呼び起こし、さらには、自分たちの身体は決して欲情を掻き立てる恐れのある「剥き出し」の裸なのではなく「光の衣服」

を纏っていると主張せざるを得なかった。神学的パラダイグマに基づいた裸体運動は、結局のところ、「剥き出し」の裸を提示することはできなかったといえる。

ここで、先に引用した西ドイツ出身者の苦情をアガンベンの洞察に照らし合わせて考察してみよう。ヌーディストの身体が公衆にさらされた途端、西ドイツ出身者には、それを忌避すべきものと考えた。ズーレンのような民族主義的演出は流石に用いなかったとしても、ポルノグラフィの存在した西ドイツでは、「公衆の興味本位」な視線によって「剥き出し」の裸体が猥褻化されないために、樂園のアダムとイヴのように特別な区域に「保護」⁹することが必要だったといえる。FKK 指定区域という空間上の限定が、「剥き出し」の裸体を保護する概念上の衣服となっていたのだ。それ故、西ドイツ出身者にとって、裸の遊泳者と水着着用者の混在は、この「樂園保護区」というレトリックを台無しにする光景に等しかっただろう。なぜなら、物質としての衣服は原罪後の人間を示す記号であり、この記号を纏ったものの混在は、「保護区」という「光の衣服」を纏った裸体と猥褻な裸体という理念上の対立構造を、衣服の着脱という物質的な対立構造に世俗化してしまうからだ。FKKゾーンにおける水着着用者の存在は、ヌーディストから光の衣服を剥ぎ取り、

「剥き出し」の裸体を出現させることを意味し、また、水着用ビーチへのヌーディストの侵入は、原罪後の着衣の世界への「剥き出し」の裸体の乱入、いわば「猥褻物陳列」的行為でしかなかったといえる。西ドイツ出身者の苦情が明らかにしたのは、西ドイツにおける性規範は、依然として「いにしへの神学的」パラダイグマの中にあったということである。

そうであるなら、裸体の氾濫を許していた東ドイツにおいては、1990年の時点で、この神学的パラダイグマから解放されていたのであろうか。東ドイツにおけるFKK運動の歴史的経過を追ってみよう。

東ドイツにおけるFKK運動は、戦後、知識人や芸術家を中心に盛り上がり、1950年代初頭には部分的にFKKビーチが解放されつつあった。「小市民的資本主義的宗教的偏見からの解放」(*Spiegel Online* 2012/8/5)¹⁰を唱える急進的なヌーディストたちは、FKK指定区域への衣服を纏ったままの侵入者やカメラを持った窃視者に過激な制裁を加えた。よって、この時点では、西ドイツと同様、東ドイツにおいてもヌーディストはFKK指定区域内に留まり、その区域に着衣者が立ち入ることは無作法と考えられていたといえる。侵入者への制裁が西ドイツの週刊一般誌『シュピーゲル』によって報じられる(*Der Spiegel* 1954/37: 13)と、体面を重んじた東ドイツ当局はFKKビーチの閉鎖を命じる(Garbe 2012: 89-90)。しかし、FKK運動の盛り上がりには歯止めをかけるのは難しく、また、ヌーディストのなかに政府要人も含まれていたこともあり、2年後にはその禁止が解除されている(*Der Spiegel* 1995/27: 69)。その後、ヒッピー・ムーブメント¹¹が加わって、FKK支持者が増加すると、当初の「軍隊めいた」セクト的なFKK運動は、「左右どちらの側と見られようとお構いなく、イデオロギーなど関係なく、単に裸で泳ぎたい人々」に凌駕されてしまう。むしろ、50年代の「使命感にあふれた裸体主義者」たちは、戦後生まれの「違ったことをしてみたくて、慣習に反

抗したいだけ」の若者によって、嘲笑と軽蔑の的にされてしまったのである。初期の裸体主義運動者たちを「国家転覆をたくらむ集団」として危険視していた東ドイツ当局は、このような脱イデオロギー化の動きを歓迎したため、70年代には、余暇を利用した「組織されない自由な市民活動」¹²としてFKKは完全にレジャー化し大衆化してしまった(*DM* 1995/7: 68)。ヌーディズムが大衆化するということは、それを猥褻とみなす視線の消滅を意味する。裸体を隠すべきものだとする意見の少数化は、神学的パラダイムに依拠したFKK正当化のディスクールを無用のものとしてしまう。つまり、「ポルノグラフィや娼婦の猥褻な裸に対して、〈光の衣服〉としての裸を対置する」必要はなくなるのである。そもそも東ドイツでは、公にはポルノグラフィや娼婦は存在しない¹³ことになっていたのだから、わざわざ「光の衣服」を持ち出す必要もなかっただろう。さらに、壁が築かれた1961年以降は、東ドイツの人々は資本主義の影響から断絶されていたのだから、初期のFKK運動のモットー「小市民的資本主義的宗教的偏見からの解放」は、もはや無用の長物と化してしまう。多数派であるヌーディストたちは、1980年代にはFKKゾーンから水着着用者を排除する必要もなくなっていた。したがって、壁崩壊直前には、東ドイツのヌーディストたちは自らの行動を正当化するディスクールなど必要とせず、壁崩壊後には習慣として「単に裸でそこにいた」(*DM* 1995/7: 68)だけなのだ。

これらのことから、バルト海沿岸で起こったFKKの習慣をめぐる衝突は、どのような状況において裸体を卑猥とみなすかという、お互いの性規範の拠って立つパラダイムの問題であったことは、明らかであろう。だが、この紛争は、互いの性規範の摺合せを図る前に、バルト海の保養地責任者や統一後に参入した資本家が「金払いの良い西からの休暇旅行者」のためビーチゾーンを分かち標識を立て、海岸に氾濫するヌーディストたちを狭い区域に囲い込むことで、暴力的に決着がつか

けられてしまう。また、東ドイツ時代から存在したが、忘れ去れていたヌードビーチ利用規定条例が適用され、裸の遊泳者はFKK指定区域からみだりにはみ出すことができなくなってしまった (*DM* 1995/7: 66)。

このような形で東ドイツのFKK習慣が否定されたとき、東ドイツ出身者による自らの性規範の正当化のディスクールが稼働し始める。先に引用したバックマンのバルト海海水浴場における「パンツ戦争」を報じる記事が掲載されると、この記事に対する読者投稿が殺到し、数か月にわたり *DM* の読者投稿欄の3分の1を占めることになる。

これらの読者投稿に共通するのは、西ドイツ出身者のFKK観が神学的パラダイグマに依拠していることを見抜き、それと東ドイツにおけるFKKの習慣を注意深く切り離していることである。例えば、イナ&ベルンハルト・メドラーという署名での投稿では、「わたしたちは、ヌーディストだと感じたことは一度もない。」と、裸体主義という思想に基づいた伝統的なヌーディスト、つまり西ドイツにおけるような裸体主義者ではないことを明言している。ところが、自らのFKKの習慣を「わたしたちは、水着なしで泳ぐ人間にすぎない」 (*DM* 1995/10: 6) と説明するとき、かの神学的シェーマが再び持ち出されている。「水着なしで泳ぐ人間」とは、まさにエデンの園におけるアダムとイヴの非着衣の形象そのものであるからである。しかし、この神学的シェーマの召喚が初期の裸体運動主義者や西ドイツのFKKの正当化のディスクールとは別の意図で用いられていることが、これに続くヨルゲン・テプファーという署名での投稿から明らかになる。「私たちは毎年バルト海に行ったけれども、それは便利だったからだし、ビーチがとても素晴らしい雰囲気だったからだ。そこに西ドイツ人がやってきて、ポルノ誌だとかピープ・ショーとかテレフォン・セックスを持ち込んだ。そして、これは絶対FKKではないといって、それがどれだけ不道徳でいやら

しいかを僕らに説明する」 (*DM* 1995/10: 6)。壁崩壊後にセックス・ショップに殺到した東ドイツ人のことは、敢えて問わないことにしよう。むしろここで重要なのは、ポルノグラフィーの存在を許容する文化にしながら、他の文化に道徳であることを要求する西ドイツの二重道徳を批判する一方で、自らの文化をポルノグラフィーのような猥褻な裸体を知らない無垢なものに仕立て上げていることだ。先のイナ&ベルンハルト・メドラーのコメントと併せて解釈するなら、西ドイツにおけるFKKは、ヌーディストの身体をポルノグラフィーという猥褻な裸体に対置させ、公衆の視線から「保護」することで成立するのに対し、東ドイツには、性を商品価値化するポルノグラフィーがなかったのだから、そのような対置は想定不可能であり、裸の遊泳者を人々は猥褻とみなしていなかったのだから、「非着衣」の状態が「保護」される必要もなかったと主張しているのだ。言い換えるなら、西ドイツにおいては、ヌーディストは自分が裸であることを知っており、猥褻な視線で記述される可能性もあるが故に、理念的な衣服を纏って原罪後の世界から楽園に回帰しなければならなかった。それに対し、東ドイツの人々は、裸体を猥褻に記述するポルノグラフィーという原罪を知る前の状態だったのであり、「非着衣」と「剥き出し」の裸体の境界さえ曖昧なままの状態、裸体に理念的な衣服を纏わせる必然性がないという意味での楽園の状態を生きていたというのである。

では、神学的パラダイグマに依拠する西ドイツにおけるFKKと自らのFKKは違うと東ドイツ出身者が主張するとき、西ドイツのものとは内実が異なるにもかかわらず、なぜ楽園のシェーマをわざわざ召喚しているのだろうか。実は、この投稿欄での「炎上」は、バルト海FKKビーチでの最初の衝突から5年後に起こっている。よって、この問いに解答を与えるためには、1990年から5年間の動きを追ってみる必要があるだろう。

4. 1991年：ヌード写真募集、但し、ポルノグラフィーお断り

「大胆でエロティックな女の子（そしてもちろん男性も）のヌード写真募集」との広告が1991年「編集室から」のコーナーに掲載される。東ドイツ時代にアマチュア写真として撮影されたヌード写真の投稿を広く読者から募集し、かつての東ドイツの「文化と風俗の歴史」をその写真から再構成しようという企画である。その際、編集部はある条件を提示する。「ポルノグラフィーお断り」である。ポルノグラフィーとヌード写真との境界線は一般に非常に曖昧なはずであるが、「あのお堅いドイツ民主共和国における唯一真の、いわば<国家お墨付き>のヌード写真を数十年に亘り提供してきた*Das Magazin*」の読者であるなら、その区別は言わずもがなであろうというのだ。実際、ポルノグラフィーが禁止されていた東ドイツでは、その代わりに多くのヌード写真がアマチュアやプロのカメラマンによって撮影された。編集部の定義よれば、ポルノグラフィーとは被写体を「セックスの対象として表現すること (die Darstellung von Sexualobjekt)」であり、東ドイツのカメラマンたちは「ポルノグラフィーとの区別を熟知していた」という。しかし、ヌード写真であってもその出版は禁じられていたので、大抵は親しい友人同士の間で見せ合うか、「個人蔵としてアルバムや保存箱の中にこっそりとしまわれる」に留まっていた (*DM* 1991/8: 3)。国家の検閲から自由になった統一ドイツにおいて、この個人蔵の写真を出版しようという *DM* の企画の意図は、ヌード写真が描き出す東ドイツの性規範あるいは「裸性」を明らかにしようという点にあった。それ故、この時点でのヌード写真集の企画は、編集者にとっても読者にとっても、前年の夏に勃発したバルト海FKKビーチでの紛争とは遠く離れた所にあったといえる。

5. 1993年「裸の共和国」展：僕らがまだ裸だったころ

翌年の1992年、300点の読者投稿から選ばれた150点のヌード写真が『裸の共和国 (*Die nackte Republik*)』¹⁴という写真集となって出版される。さらにその翌年、この写真集の原板を公開する展覧会がベルリン、ライプツィヒ、ドレスデンで開催されると、他のマスメディアでも報じられ話題を呼んだ。

人々の耳目を集めた理由は、この写真展がヌード写真の常識を裏切っていたことにある。ヌード写真の被写体となったのは、「女の子」だけではなく、老若男女問わずバリエーションに富んでおり、また、男が女を撮るだけでなく、女が女を、女が男を、男が男を撮っていたからだ。そこに映し出された裸体は、20世紀初頭のヌーディストたちが示した無性の身体、あるいはヘルムート・ニュートンのようなヌード写真史を批判的に捉えたうえでの超人的身体 (図2) ではない。一般的にヌード写真の対象となる無毛で滑らかな体表と引き締まった肉体は——いくつかはその条件を満たした作品があったとしても——あまり重要視されておらず、むしろ毛深かったり、肉や皮膚がたるんでいたり、しわが寄ったり、脂肪のついた身体がほとんどである。例えば、図3の男たちの身体は、先に引用した図1の身体と対称的である。どれも毛深く、寒さに縮こまっているものもあれば、自分の筋肉を誇示しているもの、ビール腹を突き出しているものもあり、それぞれ思い思いの格好をしているが、全体として何とも楽しそうである。図4は、毛深い女の身体が映し出されている。下腹部に生えた産毛は中央に向かってなびき、へそに差し込まれた花の茎を形づくり、陰毛はそれを育む土壌に見立てられている。図5では腰回りについた脂肪が彼女を取り囲む岩のごつごつとした体表を形作り、図6ではモデル体型とはいえない身体が並んでいる。これらの写真が、美の規範に対する批判を意図してではな

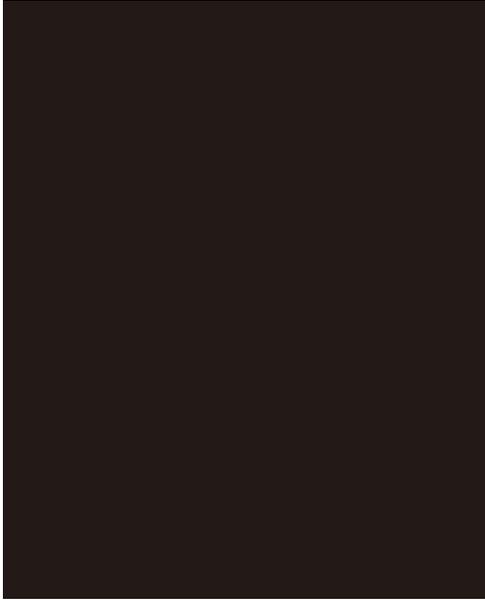


図2 Helmut Newton. 1984. They are coming.
(Heiting 2000: 189)

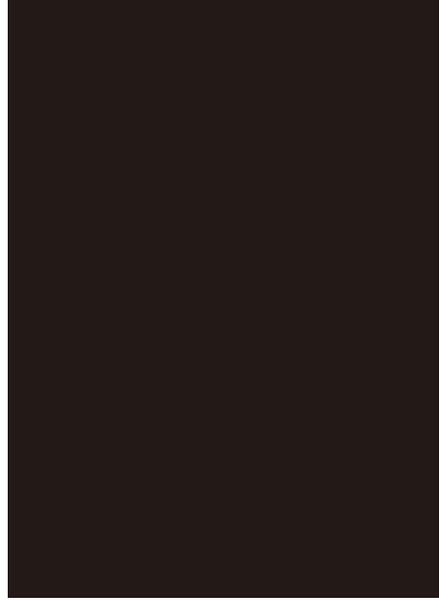


図4 (*Die nackte Republik* 1993: Roland Lozze)

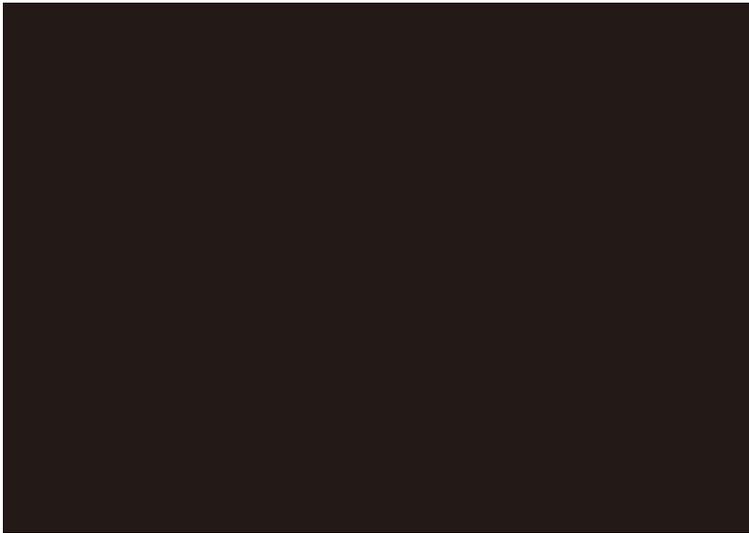


図3 (*Die nackte Republik* 1993: Ulrich Joho)

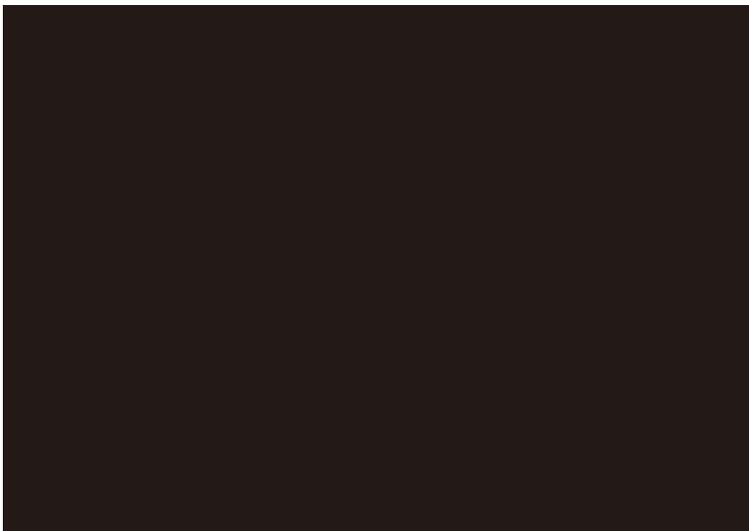


図5 (*Die nackte Republik* 1993: Susanne Mammach)

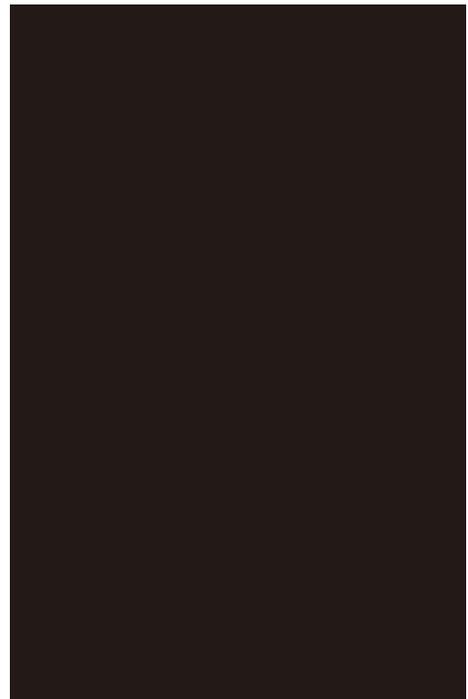


図6 (*Die nackte Republik* 1993:
Hanna Kasper)

く、被写体のもつ身体的特徴を個性として写し取ろうとした試みの結果であることは、作品から読み取れる。これについてボン大学写真学教授クラウス・ホネフは「モデルたちは規格化された美の理想とかけ離れたところ」において、写真家もまた「大衆紙に見られるような西側の商業的クリシェーに毒されていない」と西側の視点からの批評を写真集のまえがきに寄せている (*Die nackte Republik* 1993: Enthülltes Leben)。「ヌード写真における写真家の真の目標は、裸体の再現ではなく、裸体はいかにあるべきかに関する、誰か芸術家の見解を模倣することだ」(Clark 1956/1990: 7)、とクラークは述べている。この洞察が正しいとするなら、西側のヌード写真における「あるべき」裸体とは、「規格化された美の理想」に即した被写体の裸体を「商業的クリシェー」に従って修正・加工したものであることになる。だとすれば、ポルノグラフィーもまた読者が「見たいと思う裸体」を「商業的クリシェー」に従って提示するという意味で、ヌード写真と非常に近い位置にあることになる。一方、東ドイツにおけるアマチュア写真家にとっての「あるべき裸体」とは、裸体を商品価値化せず、被写体の身体的特徴を個性として描写すること、いわば目の前にある「裸体の再現」であったことになる¹⁵。それ故、裸体を「美の理想」や「商業的クリシェー」に従って修正することなく、「親密な」視線で描写されたこれらのヌード写真は、西側の鑑賞者に「窃視者」になったかのような「戸惑いを与え」(*Die nackte Republik*. 1993: Enthülltes Leben) たのだ。ここから明らかになるのは、西ドイツ出身の人々は、美的鑑賞用に裸体に修正が加えられた<ヌード写真>を期待して「裸の共和国」展を訪れたのであり、そこにプライベートな視線を通して描写される「剥き出し」の裸体が提示されようとは予想だにしていなかったということだ。

では、東ドイツ出身者はこの写真展をどのように見たのであろうか。噂を聞きつけて展覧会へ足を運んだ読者からの熱いメッセージが読者欄

を飾っている (*DM* 1993/10: 5; 1993/11: 4; 1993/12: 4) ことから、好評であったことは推察できる。しかし、そこで語られる感想は、裸体や裸体描写の仕方についてではなく、ヌード写真から喚起された記憶についてである。例えば、1993年11月号の読者投稿欄「裸」という見出しで区切られた項目には、「この信心ぶった (bigott) 社会では、旧東ドイツ地区バルト海沿岸のFKKビーチがどんどん廃止されていく。気に入らない。」(*DM* 1993/11: 4) というハラルド・フィンメルという人物の意見が掲載されている。本来、「裸の共和国」写真展の反応でまとめられるはずだったこの項目に突如差し挟まれたFKKビーチの現状に対する不満は、このヌード写真展が提示した東ドイツ出身者の裸体観がFKKにおける裸体問題と実は地続きであったことを物語っている。無論、論理的にはヌード写真とFKKにおける裸体を同列に置くことはできない。しかし、出展された作品のうちに屋外の自然¹⁶、とりわけFKKビーチで撮影された¹⁷ものが多かったことが、展覧会を訪れた東ドイツ出身者の「文化的記憶」¹⁸を呼び起こしたであろうことは、想像に難くない。それに続くパウル・ローアという署名での投書「僕らがまだ裸だった時代を現在のこんなに愚直な (bieder) 共和国にうまく移送してくれた*DM*に感謝します」(*DM* 1993/11: 4) は、東ドイツ出身の来観者が<ヌード写真>を鑑賞したのではなく、保存メディアである写真を手掛かりに東ドイツにおける<実物の裸体>の記憶を呼び起こしていたことを示唆している。僕らが見ていたのはまさにこのようなくヌード写真>だったと主張するのではなく、日常的に目にし、自らも所有していた裸体がこのようだった、とされているのは意義深い。つまり、ここで喚起されたのは、着衣の鑑賞者が鑑賞の対象として複製メディア内の裸体を眺めるといふ非対称な関係ではなく、修正など施しのない生の裸体を眺め、自らの裸体も見つめ返されるというFKKにおけるような対等な関係の記憶だったのである。写真集の最後にコメント

を寄せたDM記者バックマンは、裸体についての東西ドイツの相違を的確に表現している。「西ドイツ人は画像の中の裸体を手にしていた」のに対し「東ドイツ人は実物の裸体を持っていた」(*Die nackte Republik* 1993: Als die Bilderwelten zusammenstürzten)。西ドイツでは、ポルノグラフィを含めた複製メディアにおける裸体の露出に対して寛容であったが、その裸体は美の規範に従って人々が見たいと思うものに修正されたものであり、裸体そのもの、すなわち＜実物の裸体＞を含めた「剥き出し」の裸体の公衆への提示を容認するものではなかった。それに対し東ドイツでは、裸体をメディアに写し取り、商品的価値体系の中に置くことは禁止されていたが、＜実物の裸体＞の提示に対して寛容であり、それ故「剥き出し」の裸体をそれとして見る態度が養われていたのである。

しかし、このような「剥き出し」の裸体はドイツ統一後失われてしまったものとして東ドイツ出身者の間で認識されていることが、先のローアの言葉から読み取れる。「僕らがまだ裸だった時代 (damals, als wir noch die nackte [原文ママ] waren)」という表現は、過去に一回限り起こった出来事をあらゆる接続詞“als”を用いることによって、それがもう歴史上二度と生起せず、今や取り戻すことも不可能になってしまったことを示しているからだ。そして、彼の「まだ裸だった」という東ドイツにおける身体観は、始終裸で生活していたという意味ではもちろんなく、ある特定の文脈では裸になっても非難されることはなく、またそれ故に裸を猥褻なものともみなしていなかったことを示唆している。ところが、この裸に対する認識は紛れもなくあの聖書の逸話を背景に成立している。「まだ裸だった」とは、原罪後に裸であることにはじめて気付き衣服を纏ったアダムとイヴ同様、統一後の性規範に従って衣服の着脱が裸体を規定する価値体系に組み込まれたからこそ出てきた言葉遣いだからである。したがって、東ドイツ出身者が「裸だった」というとき、それは

理念的な衣服を纏った「裸」なのではない。そのような操作など必要ない、西側の美の規範によって修正が施されていない「剥き出し」の裸だったのである。

東ドイツ出身者が統一後に事後的に認識した東ドイツにおけるこのような裸体観は、性規範に対する従来の評価にも変化を与えている。西ドイツの性規範が優位を占める統一ドイツに対し、フィンメルは「信心ぶった」、ローアは「愚直」という形容詞をつけている。これらは、「剥き出し」の裸を隠すべきものだとする西ドイツの性規範を踏襲した統一後のドイツ社会に対する東ドイツ出身者の不満を表わしている。よって、壁崩壊時に支配的だった「開放的な西ドイツとお堅い東ドイツ」というイメージは消滅し、かわりに「開放的」で「裸だった」東ドイツと信心ぶった統一ドイツというイメージが東ドイツ出身者のなかに立ち現われてきたといえる。

6. 1994年: 東の熊は毛皮を脱ぐ

東ドイツにおける「裸の状態」が回復不能なものとして東ドイツ出身者に想起されていたことは、すでに彼らが「原罪後」の価値体系に順応し始めていたことを示している。

1994年3月号に掲載された一枚のカリカチュアはこの事態を的確に表象している(図7)。一匹の雌熊が陰毛を剃り落しているこの絵は、新しくドイツ連邦共和国国民に加わった東ドイツ出身者が西側の美の規範に順応する様子を風刺している。西ドイツ出身者が「人の羞恥心も気にせず[裸で]水に飛び込む猿」(*Der Spiegel* 1999/36: 74)だと東ドイツ出身者を評しているのを踏まえ、自らを裸に対する羞恥心のない動物＝熊だと自虐的に表象している。熊(Bär)はドイツ語で陰毛を表す隠語でもあるが、壁崩壊まで東ドイツでは、ヌード写真のモデルも含めて、腋毛と陰毛を剃る習慣がなかった。一方、西ドイツでは80年代ごろから腋毛の処理が一般化していた。統一後に「西側文

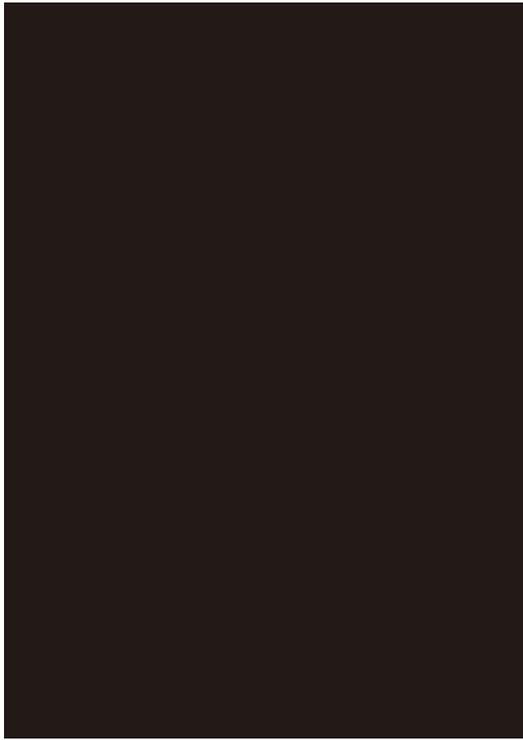


図7 Holger Ficklescherer (DM 1994/3: 扉)

化」を目の当たりにした東ドイツ出身者のなかには、この習慣に従った人々も少なからずいたであろう¹⁹。このような処理は、「剥き出し」の裸体に当然あるはずの体毛を美の規範に沿わないものとみなして剃り落す、いわば裸体修正である。雌熊の毛皮の下に現れた皮膚は、自らの「剥き出し」の裸という無修正の状態を「恥ずかしい」と思い、裸体を美の規範へと修正するためにさらに毛皮を脱ぐという逆説的行為を象徴している。このような転倒的な脱衣行為によって、東ドイツ出身者たちは、美の規範に即して裸体を修正し、それ故に「剥き出し」の裸を隠蔽する文化に統合されていくのである。

7. おわりに

東ドイツ出身者が自らの過去の裸体文化を正当化しようとするとき、楽園のシェーマを再召喚せざるを得なかったのは、その時点ですでに西ドイツの性規範を基盤とする統一ドイツの価値体系に組み込まれてしまっていることを自覚していたからだといえる。実物の裸体の公衆への提示を忌避

し、美の規範に従って裸体を修正することで「剥き出し」の裸体を回避してきた西ドイツの性規範に対し、東ドイツ出身の読者は、商品規格化された美の規範に拠らない裸体を東ドイツ時代のヌード写真やFKKビーチに見出すことで、「剥き出し」の裸体をそれとして見つめる可能性を示唆しようとした。ここには、性の商品化の禁止が実現せしめた東ドイツにおける開放的な裸体文化に対する再評価が読み取れる。FKKビーチでの文化的衝突を契機に、東ドイツ出身者のなかで「お堅い」東ドイツから「開放的な」東ドイツへと自文化の評価が逆転したことが、それを端的に示している。「オスタルギー」(東ドイツ時代への郷愁)という語で総括されてしまいがちな東ドイツ出身者のこのような言動は、今は亡き過去への単なる逃避ではなく、自らの性規範を肯定的に評価しなおすことで、統一後の世界を生き延びようとする戦略だといえる。

本稿は、平成23-24年度科学研究費若手研究 (B) (課題番号23720092) の研究成果の一部である。

【注】

- 1 本稿では、ドイツ連邦共和国 (1949-1990) を「西ドイツ」、ドイツ民主共和国 (1949-1990) を「東ドイツ」と表記する。
- 2 1995年に行われたアンケートでは、72パーセントの東ドイツ出身者が統一ドイツにおいて自分が二級市民のように扱われていると感じていると答えている (*Der Spiegel* 1995/27: 49)。
- 3 映画 *Sonnenallee* (1999)、『グッバイ・レーニン』(2003) の公開は、東ドイツ文化が東ドイツ出身者以外の人々に着目される契機となった。2006年にベルリンの博物館島の脇に東ドイツ博物館が設立されたのも、オスタルギー・プームの影響の一つである。
- 4 東ドイツ時代の歩行者用信号機の人型「アンペルメンヒェン」や子供人気番組のキャラクター「ザントマン」がそのいい例である。両者とも信号機の再設置や番組の復活という形でのリバイバルを遂げたが、それらがキャラクター商品化されて土産物店を飾っていることから、オスタル

- ギー現象には商品価値という資本主義的市場原理が内包されていることが推察できる。
- 5 女性読者からは、雑誌の質的な向上やこれまでタブーとされていたテーマへの言及を求める声はあっても、ヌード写真の掲載に対しては否定的な意見が多かった。これを受けて、編集部は、ポルノ誌に成り下がらないという結論を出したが、実際は販売数維持のため、ヌード写真に多くのページが割かれる結果となった。
 - 6 近年、インターネット上のブログ等に散見される性産業としてのFKKは、裸体運動とは全く関係のないものである。したがって、性産業としてのFKKは本稿では考察の対象としない。
 - 7 http://www.ndr.de/geschichte/chronologie/fkkddr115_page_2.html 参照
 - 8 ドイツ裸体運動協会理事長クルト・フィッシャーによれば、1980年の加盟者数（西ドイツ）は6万5千人である（2012年11月18日、筆者によるインタビュー）。
 - 9 FKK 指定ゾーンのことをドイツ語では、しばしば「裸遊泳保護区（Nacktbade-Reservat）」と表現する。
 - 10 http://einestages.spiegel.de/static/topicalbumbackground/2127/aufstand_der_nackten.html 参照
 - 11 ベトナム戦争に対する反戦運動としてアメリカで始まった運動だが、東ドイツの若者の間にも（ベトナム）反戦および反体制運動として広まった（*DM* 1991/6: 50-53）。
 - 12 あらゆる運動の組織化は東ドイツにおいて禁じられていたため、西ドイツのようにFKK協会が設立されることはなかった。
 - 13 もちろん、非公式には存在した。ポルノグラフィーは闇で取引され、娼婦は外貨（西ドイツマルク）獲得や諜報のために国家公安局の手引きで西側からの観光客にあてがわれた（リースナー 2012: 229-230）。
 - 14 この写真集にはノンブルがふられていない。以下、文章の引用には記事のタイトルを、写真の引用には撮影者名を括弧内に記すこととする。
 - 15 但し、「裸の共和国」写真展のヌード写真は、東ドイツ時代の *DM* に掲載されていた「国家お墨付き」のヌード写真とは違う。後者は、東ドイツ体制が「あるべき」だとした「上品」な裸体が写されている。このことは、体制側と一般的なドイツ人の間に裸体観の乖離があったことを示している。
 - 16 （フラッシュなどの）器具不足からくる採光の都合上、屋外での撮影が好まれた。
 - 17 写真家でなくとも、仲間内であればFKKゾーンでの撮影は一般的であったようだ。例えば、東ドイツの歌手ニナ・ハーゲンの大ヒット曲（1974年）「カラーフィルムを忘れたのね」では、青空と白い砂浜と緑という色彩満点のすばらしい日に、大胆なビキニにミニを履いてFKKビーチでデートしたニナ・ハーゲンが、後日、白黒で現像された写真を見て大粒の涙を浮かべ、あの日カラーフィルムを忘れたでしょう、と恋人ミヒヤを睨めつけるという光景が歌わ

れている（Hagen 2001: Du hast den Farbfilm vergessen）。

- 18 個人的な記憶としてではなく、文字や画像などの記録媒体によって喚起される文化共同体内の共有イメージをアスマンは「文化的記憶」と呼んだ（Assmann 2011: 149-240）。
- 19 壁崩壊前までの *DM* に掲載されたヌード写真のモデルにも、明らかに腋毛が観察されるが、統一後は、腋毛のない無毛の滑らかな表層の身体に刷新されている。

<参考文献>

- Agamben, G. (Übers. v. Hiepko, A.) 2009. *Nacktheiten*. Frankfurt am Main: Fischer.
- Ahbe, T. 2005. *Ostalgie: Zum Umgang mit der DDR-Vergangenheit in den 1990er Jahren*. Erfurt: Landeszentrale für Politische Bildung Thüringen.
- Assmann, A. 2011. *Erinnerungsräume*. (5. Auflage) München: Beck C. H.
- Berger, J. 2008. *Ways of Seeing*. London: Penguin.
- Bergemann, H. 2000. *Lichtkämpfer, Sonnenfreunde und wilde Nackte: Zur Geschichte der Freikörperkultur in Deutschland*. Berlin: Magnus-Hirschfeld-Gesellschaft e. V.
- Brussig, T. 2001. *Am kürzeren Ende der Sonnenallee*. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag.
- Clark, K. 1956/1990. *The Nude: A Study in Ideal Form*. (Paperback 8th ed.) Princeton: Princeton University Press (高階秀爾・佐々木英也訳. 2004. 『ザ・ヌード: 理想的形態の研究』筑摩書房).
- Duerr, H. P. 1997. *Nacktheit und Scham: Der Mythos vom Zivilisationsprozeß*. Frankfurt am Main: Suhrkamp. (藤代幸一・三谷尚子訳. 2006. 『裸体とはじらいの文化史』法政大学出版局)
- Garbe, E. 2012. *Natürlich nackt: FKK und Akt in der DDR*. Halle (Saale): Mitteltdt. Verlag.
- Heiting, M. (Hrsg.) 2000. *Helmut Newton, Werk*. Köln: Taschen.
- Hagen, N. 2001. *Sternenmädchen*. o. O.: Ariola Express (Sony Music) [CD].
- Kupfermann, T. 2008. *Sommer, Sonne, Nackedeis: FKK in der DDR*. Berlin: Eulenspiegel Verlag.
- Mosse, G. L. 1987. *Nationalismus und Sexualität*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt-Taschenbuch-Verlag (佐藤卓己・佐藤八寿訳. 1996. 『ナショナリズムとセクシュアリティ: 市民道徳とナチズム』柏書房).
- Surén, H. 1924. *Der Mensch und die Sonne*. Stuttgart: Dieck & co, Sportverl.
- Surén, H. 1936. *Mensch und Sonne: arisch-olympischer Geist*. (12. Aufl.) Berlin: Scherl.
- Das Magazin*. Berlin (Ost): Berliner Verlag. (1989-1990); Hamburg: Gruner & Jahr (1991-1992); Berlin: „Das Magazin“ Verlagsgesellschaft mbH (1992-1995).
- Der Spiegel*. Hamburg: Spiegel Verlag.
1993. *Die nackte Republik: Aktfotografien von Amateuren aus 40*

Jahren Alltag im Osten. Berlin: Das Magazin Verlag.
Die Woche. Hamburg: Hoffmann u. Campe.
Die Zeit. Hamburg: Zeitverlag Gerd Bucerius.
Süddeutsche Zeitung. München: Süddeutscher Verlag.
ジョルジョ・アガンベン (岡田温司・栗原俊秀 訳). 2012.『裸性』平凡社.
大宮勘一郎. 2007.「纏うことにおける平滑と条里」『纏う: 表層の戯れの彼方に』水声社: 199-228.
伸井太一. 2009.『ニセドイツ 2 ≡ 東ドイツ製生活用品』社会評論社.

フランク・リースナー (清野智昭・生田幸子訳). 2012.『私は東ドイツに生まれた: 壁の向こうの日常生活』東洋書店.
斎藤昌人. 2011.「ドイツ裸体運動における身体」『高知大学学術研究報告』60: 61-71.
多木浩二. 1992.『ヌード写真』岩波書店.
田野大輔. 2010.「裸体への意志: 第三帝国におけるヌードとセクシュアリティ」『甲南大学紀要 文学編』160: 163-178.